

「離一多性を証因とする無自性論証」と avicāraikaramaṇīya をめぐる問題

赤 羽 律

[1] この論文において、「考察されない限り喜ばしいもの」(avicāraikaramaṇīya) という表現と「離一多性を証因とする無自性論証」という二つを取り上げる。何故なら、松本史朗氏と小林守氏が、この二つの表現を年代確定の指標として重要視しているからである¹⁾。そこで、これら二つの表現の起源を探ると共に、それに基づいて Avalokitavrata の活躍年代について考察する。

[2] 最初に、avicāraikaramaṇīya という表現を取り上げる。この表現の他にも、avicāraikaramya や avicāraramaṇīya など、幾つかの類似表現が諸文献に見出されるが、これらは全て基本的に同義であることから、ここでは avicāraikaramaṇīya という表現をそれらの代表として扱う。この表現を用いる中観派の論師としては、Candrakīrti, Avalokitavrata, Śāntaraṅkṣita, Kamalaśīla, Śrīgupta, Prajñākaramati や Parahita などの名前が挙げられる。そして、これらの中で最も早い人物と考えられるのは、Candrakīrti である。ただし、この表現は Candrakīrti の代表的な論書である MAV や PrasP などには見出されず、MAP にしか見出されない。ところが、MAP に関しては、著者名と翻訳者名とが共に Candrakīrti となっていることから、既に Ruegg 氏によって PrasP 等の著者である Candrakīrti とは同名異人の手による作品であろうと指摘されている²⁾。また、Candrakīrti は PrasP において、avicāraikaramaṇīya という表現を用いず、avicāraprasiddha という表現を用いている³⁾。その他、この avicāraprasiddha と類似した表現が Dharmapāla の『大乘広百論釈論』中にも見出されることが、松下了宗氏によって指摘されている⁴⁾。これらの事実に基づくならば、PrasP の著者である Candrakīrti は avicāraikaramaṇīya という表現を知らなかったと考えて構わないであろう。それ故に、この表現を最初に用いた人物は Avalokitavrata であると考えられるのである。

[3] そこで、Avalokitavrata が PPT 中で、この表現をどの様に用いているのかを考察してみると、以下のように、世俗に関する三つの特徴のうちの一つとして挙げられていることが分かるのである⁵⁾。

「離一多性を証因とする無自性論証」と avicāraikaramaṇīya をめぐり問題（赤羽）（125）

- (1) 内と外の縁起するもの。
- (2) 考察されない限り喜ばしいもの。
- (3) 幻のみとして効果的作用の能力が有効なもの⁹⁾。

ところが、この avicāraikaramaṇīya という表現は、Śāntarakṣita の MAV において、やはり世俗の定義の一つとして挙げられているのである。さらに MAV において世俗の特徴として挙げられている別の二つの特徴が、PPT のこの残り二つの特徴と類似しているのである⁷⁾。このことから、丹治昭義氏は、Avalokītavratā の PPT における世俗解釈が Śāntarakṣita の MAV に影響を与えた可能性を指摘している⁸⁾。

[4] 次に、もう一方の「離一多性を証因とする無自性論証」を取り上げる。この無自性論証が最初に用いられたのは MAV であると考えられている⁹⁾。そして、MAV の「離一多性を証因とする無自性論証」の成立に際し、Dharmakīrti の PVIII k° 360 など「離一多性」を根拠に無自性性を主張する諸偈の影響が指摘されている¹⁰⁾。しかし、江島恵教氏が指摘するように、PVIII 中の「離一多性による無自性論証」と、MAV 中のそれとは質的に差が存在するうえ、Dharmakīrti と Śāntarakṣita との間には約一世紀の差が存在するために、Śāntarakṣita が PVIII から直接的に MAV に見られる「離一多性を証因とする無自性論証」を作ったと考えるよりも、この両者を繋ぐような論書が存在するのではないかと推測されているのである¹¹⁾。そこで PPT が問題となる。既に見たように、avicāraikaramaṇīya という表現に関しては、PPT が MAV に影響を与えた可能性が丹治氏によって指摘されているのである。それ故に、この「離一多性を証因とする無自性論証」も PPT に存在し、MAV に影響を与えた可能性は十分にある。しかし結論から言うならば、PPT にこの「離一多性を証因とする無自性論証」を見出すことは出来なかった。ただし、次の様な例が存在することを指摘しておきたい。

rmi lam glog dang sprin lta bur // (om. in P) zhes bya ba'i dpe gsum gyis bstan to // ① de la rmi lam gyi dpe ni 'das pa'i 'dus (dus in P) byas de dag bdag med pa rnam pa gnyis su rjes su rtogs pa bstan to // ② glog gi dpe ni da ltar byung ba rnam gcig dang du ma'i rang bzhin dang mi ldan pas rang bzhin gzung du med pa'i phyir bdag med pa gnyis po de rjes su rtogs pa bstan to // ③ sprin gyi dpe ni de'i sa bon gnas ngan len ma'ongs pa'i bdag nyid sprin lta bus sems nam mkha' lta bu la 'bras bu skyed pa rnam gcig dang du ma'i rang bzhin dang mi ldan pas rang bzhin gzung du med pa'i phyir bdag med pa gnyis po de rjes su rtogs pa bstan to // ¹²⁾

ここでは、三種の喩例（夢・稲妻・雲）をそれぞれ過去・現在・未来に対応させて人法の二無我が説明されている。そのうち現在と未来に関して、離一多性を理

(126) 「離一多性を証因とする無自性論証」と avicāraikaramaṇiya をめぐる問題 (赤 羽)

由に無自性性が説明されている。ただし、ここでは無自性性の根拠として離一多性が示されてはいるが、MAV に見られるような推論式の形は用いられていない。つまり、Avalokītavratā はここで取り上げる二つのうち、avicāraikaramaṇiya という表現は知っていたが、一方で、離一多性を根拠に無自性性を説明しようという意図を持ってはいたものの、MAV の様な「離一多性を証因とする無自性論証」は知らなかったと考えられるのである。

[5] 最後に、Avalokītavratā の年代論について言及しておく。彼の活躍年代に関しては、はっきりしないが、PPT には、MMK に対する八大注釈家の一人として Candrakīrti (ca. 600-650)¹³⁾ の名前が挙げられており¹⁴⁾、また、その内容に Dharmakīrti (ca. 600-660) の影響が見られることから、Avalokītavratā の活躍年代の上限は、およそ 650 年頃であることが分かる。また、IHan dkar ma (IDan dkar ma) 目録にその名前が見出されることから、下限はおよそ 800 年頃であることが想定されるのである¹⁵⁾。こうした条件を踏まえ、彼の活躍年代に関しては以下の三種の仮説が提出されている。

(1) 約 650 年説。これは梶山雄一氏によって提出されたものである¹⁶⁾。同氏は、PPT に Candrakīrti の名前は見出されるものの、彼の MMK に対する注釈書である PrasP の内容についての言及が見出されないことから、Avalokītavratā は Candrakīrti を MMK の注釈者として名前は知っていたものの、彼の注釈書である PrasP の内容については知らなかったとし、Candrakīrti とほぼ同年代であると想定している¹⁷⁾。

(2) 約 750 年説。これは羽田野伯猷氏によって提出されたものである¹⁸⁾。同氏は、Avalokītavratā の名前が Tāranātha 中に Haribhadra (ca. 800) の約一世代前の人物として名前が挙げられていることを根拠としている¹⁹⁾。

(3) 約 700 年説。これは江島恵教氏による PPT の内容に基づく推定である²⁰⁾。

これらのうち、もし羽田野説に従うなら、Avalokītavratā は既に見たように Śāntaraṅṣita に先行する人物にも関わらず、その活躍年代は Śāntaraṅṣita のそれと重なってしまう。また、梶山説に従うなら、avicāraikaramaṇiya という表現を知らない Jñānagarbha は 8 世紀前半頃に活躍した人物であるにも関わらず²¹⁾、Avalokītavratā 以前の 7 世紀前半の人物と考えざるを得ないことになってしまう。それ故に、江島氏の説が最も妥当であるように思われる。ただし PPT は非常に大きな論書であり、その内容に関しては不明な点も多いことから、彼の活躍年代についてはさらに慎重に吟味されるべきであろう。

[6] まとめとして、以下の三点を指摘しておく。

1. avicāraikaramaṇīya という表現を仏教論者として最初に用いた人物は, Śāntarakṣita に先行する Avalokitavratā である²²⁾.
2. Avalokitavratā は離一多性を根拠に無自性を主張するものの, MAV に見られるような「離一多性を証因とする無自性論証」は知らなかった.
3. avicāraikaramaṇīya と「離一多性を証因とする無自性論証」この二つの使用の有無に基づくなら, Avalokitavratā の活躍年代は 700 年頃と推定される.

略記号: **D.**=sDe dge ed.; **GOS**=Gaekwad's Oriental Series; 印仏研=印度学仏教学研究; **JA**=Journal Asiatique; **MAP**=Madhyamakāvātāraprajñā; **MAV**=Śāntarakṣita's Madhyamakālamkāravṛtti: M. Ichigo. Madhyamakālamkāra 1985; **MAv**=Candrakīrti's Madhyamakāvātāra; **MMK**=Mūlamadhyamakākārikā; **P.**=Peking ed.; **PPT**=Avalokitavratā's Prajñāpradīpatikā; **PrasP**=Candrakīrti's Prasannapadā; **PV III**=Dharmakīrti's Pramāṇavārttika III: Y. Miyasaka. Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan), *Acta Indologica* Vol. II; **SDV**=Satyadvayavibhaṅgavṛtti; **T.**=大正新修大藏經; **TAV**=Śrīgupta's Tattvāvatāravṛtti; **WZKS**=Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens; **WZKSO**=Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens.

- 1) 松本氏と小林氏は, チベット伝承に基づく 8 世紀における中観論師の年代論, Śrīgupta → Jñānagarbha → Śāntarakṣita → Kamalaśīla を否定し, Jñānagarbha → Śāntarakṣita → Kamalaśīla → Śrīgupta という年代論を推定している. その根拠は次の二点である. (一) Jñānagarbha だけがここで扱う二つの表現を SDV で用いていないことから, これら四人の中観論師のうち, Jñānagarbha が最も早い人物であり, 少なくとも Śrīgupta は Jñānagarbha 以降の人物である. (二) Śrīgupta の TAV の内容が Śāntarakṣita の MAV に酷似している上に, その分量が MAV に比べかなり小さく, TAV の最後に TAV が何らかの備忘録 (brjed byang) であると述べられていることから, TAV を MAV の備忘録と考え, Śāntarakṣita と Kamalaśīla 以後の人物とする. 松本 [1978]: 「Jñānagarbha の二諦説」『仏教学』5, pp.109-137; 小林 [1992]: 「シュリーグプタ作『真実への悟入』一和訳研究 (上) —」『論集』19, pp.(37)-(56) 参照.
- 2) Ruegg [1981]: *The literature of the Madhyamaka school of Philosophy in India, A History of Indian Literature* VII, Wiesbaden p.81 参照. 更に後で考察するように, MAP には Śāntarakṣita が初めて用いたと考えられる「離一多性を証因とする無自性論証」が用いられていることから, PrasP の著者である Candrakīrti の作品であるとは考えられない.
- 3) PrasP: D. 22b7, D. 58b7, S. Yamaguchi [1974]: *Index to the Prasannapadā Madhyamakavṛtti, Part one Sanskrit-Tibetan, Part two Tibetan-Sanskrit*, 平楽寺書店. 松本 [1984]: 「後期中観派の空思想」『理想』610, p.144 参照.
- 4) T. 30, 247b3-6; 松下 [1984]: 「Satyadvayavibhaṅgavṛtti 研究をめぐる諸問題」『龍大仏教文化研究所紀要』23, p.15.
- 5) theg pa chen po'i (po in P.) dbu ma pa'i tshul 'di la kun rdzob kyi tha snyad du ni (1) phyi dang nang gi rten cing (ad. rten cing in D.) 'brel bar 'byung ba (2) ma brtags (/ad. in P.) gcig (cig in P.) pu na nyams dga 'ba (3) sgyu ma tsam du bya ba byed nus par yod

(128) 「離一多性を証因とする無自性論証」と avicāraikaramaṇīya をめぐらる問題 (赤羽)

- cing de la mngon par zhen pas ni srid pa gsum du 'khor zhing kun nas nyon mongs pa'i rgyun kyang 'brel par 'gyur la / (PPT: Chapter 18, P. [97] =a 102bz-3).; PPT にはもう一箇所この表現が見出される。(Chapter 11; P. [97] sha 285b2).
- 6) 丹治 [1988]: 「生死即涅槃」『仏教思想』10, p.215 参照.
 - 7) ① ma brtags gcig pu nyams dga' zhing // ② skye dang 'jig pa'i chos can pa // ③ don byed pa dag nus mams kyi // rang bzhin kun rdzob pa yin rtogs // (MAV: k° 64, p.202).
 - 8) 丹治 [1988] p. 214.
 - 9) MAV K° 1 を参照. ただし, 森山清徹氏によると『仏性論』(T. 31, 790c) 中に同様の内容が見られるという. 森山 [1991]: 「Madhyamakāloka の無自性論証と『仏性論』」『印仏研』40-1, pp. (108) - (113). 参照.
 - 10) PV III. k° 360, 209, 210cd, 216cd. 江島 [1980]: 『中観思想の展開』春秋社 p.233 参照.
 - 11) 江島 [1980] pp. 223-226 参照.
 - 12) PPT: Chapter 7; D. sha 153b1-b3; P [97] sha 173b2-6.
 - 13) Candrakīrti の年代に関しては, Ruegg [1981] p. 71 を参照のこと. ただし諸異論が存在する. 岸根敏幸 [2001]: 『チャンドラキールティの中観思想』大東出版 pp.26-34 参照.
 - 14) Candrakīrti の名前は PPT において, MMK の八大注釈家の一人として, 僅か三回のみ言及されている. PPT: D. 73a5, 102a2, 153b3.
 - 15) M. Lalou [1953]: “Les textes bouddhiques au temps de Khri-sroñ-lde-bcan” JA241, p. 333, no. 575 参照.
 - 16) Y. Kajiyama [1963]: “Bhāvaviveka's Prajñāpradīpaḥ (I. Kapitel)” WZKS07, p. 39 と, 同 [1973]: “Affirmation and Negation in Buddhist Philosophy” WZKS 17, p. 162 参照.
 - 17) 丹治氏は梶山氏と同様 Avalokītavratā の活躍年代を 650 年頃と想定している. 丹治 [1988] p. 248, 注 (208) 参照.
 - 18) 羽田野 [1952]: 「数論派における解説論と数論偈」『印仏研』1-1, p. 166.; A. Schiefner [1868]: *Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione* (texte tibétain), Peteropoli, (reprint 1963. Tokyo), p. 162 参照.
 - 19) この Haribhadra は Abhisamayālamkāraḥ 著者として知られている人物である.
 - 20) 江島 [1980]: p. 16 参照.
 - 21) Jñānagarbha の年代に関しては, 松本 [1978] p. 113 と小林 [1992] p. 93 参照.
 - 22) この事実は Avalokītavratā が avicāraikaramaṇīya という表現を考案し, 使用した最初の人物であるということ必ずしも意味しない. 何故なら, 8 世紀頃に活躍したジャイナ教の Haribhadra の Anekāntajayapatākā という論書にもこの用語が見出されるからである. *Anekāntajayapatākā by Haribhadra Sūri with his own commentary and Muncandra Sūri's supercommentary* Vol. 1 ed. by H. R. Kāpadiā, GOS 88, p. 250 参照. これらの事実から, avicāraikaramaṇīya という表現が多用されるのは 700 年以降であると思われる.

〈キーワード〉 avicāraikaramaṇīya, Avalokītavratā, 離一多性を証因とする無自性論証
(大阪学院短期大学非常勤講師)